

政治漫画にみる村山政権

茨木 正治

- I はじめに
- II 議題設定機能と「政治漫画」
- III 内容分析
 - (1) 分析手順
 - (2) 分析結果と考察
 - ① テーマの分析
 - ② シンボルの分析
- IV おわりに

I はじめに

一九九四年六月三〇日に発足した自社さ連立政権である村山政権は在任期間で細川政権を抜き、唯一の社会党政権であった片山哲政権（四七年五月から四八年三月、二九二日）をも追越し、五五五日を迎えた一九九六年一月五日に突如退陣を表明した。成立から崩壊まで終始「意外性」をもった政権であった。そもそもこの政権は、自民党の一党体制であった五五五年体制の終焉を目的とした連立政権の一環として成立したにもかかわらず、その連合が自民党と社

会党との連立であったために「野合」の謗りを受けた。しかしながら、自・社連合も連立の一形式にすぎないと考えれば、「野合」の批判は五五年体制時代の自民・社会の対立構造をひきずったものであるとみることができよう。

このように五五年体制の崩壊後登場した連立政権は、従来の政治の枠組みを少なくとも形の上からまず変化させようとしている。政治状況の変化はそれを伝えるマス・メディアにも影響を及ぼしている。たとえば、連立政権の登場以来、新聞の一齣漫画である「政治漫画」にも変化が見え始めている。単純な体制批判でも賛美でもない多様な現実を曖昧のままに受け取る姿勢が「政治漫画」の中に生じてきた。これは「政治漫画」にとつては大きな変化であると言わざるを得ない。というのは、「政治漫画」は「白黒はつきりさせる」ことを目的として描かれたメディアであったからである。つまり、混沌とした政治状況を一枚の画像に集約させるには、過度の単純化と善悪・左右・表裏といった二元論に基づく構成が必要である。それによって、政治の世界の内容をわかりやすく一般の「政治ざらい」の人々にも伝えることができたのである。同時に、現実の政治状況自体が二元論に収斂できるほど見かけでも単純な時代であれば、「政治漫画」は「企業努力」に努める必要がごく少量ですんだ。五五年体制は、この意味で格好の「政治漫画」の「安息地」であった。

ところが、活字と画像の両方の性質を合わせ持ち、多様な現実を一枚の画に凝集させて表す「政治漫画」は複雑化が進む現代の政治状況の中で「何が重要か」という議題設定の機能を持ち、その機能を活かす時期に来ている。残念ながら、「政治漫画」のこのような機能を分析するための研究はほとんどみられない。「政治漫画」そのものの研究が社会科学では「政治漫画」の歴史の長さとは裏腹にまだ始められたばかりである。

本稿は、「政治漫画」の議題設定機能における現実の再構成に着目し、修辞学の知見を若干援用しつつ村山政権を描く「政治漫画」のテーマとシンボルの分析を通じて、村山政権の性格を明らかにしようとするものである。

II 議題設定機能と「政治漫画」

社会生活を営む上で重要な事柄は何であり、それらのうちどれが最も重要で以下どのような順序になるのか（なる
と最適か）を考える際に、マス・メディアが大きな役割を果たすことがある。この重要点の指摘ならびに順序づけに
着目したのがマス・メディアにおける議題設定機能研究（agenda-setting approach）である。マス・メディアが強
調し顕在化させた争点や主題が受け手が自覚する争点・主題の重要・顕在性にかなり高い相関と因果関係がみられる。
そこで、マス・メディアの持つ争点や主題の設定が受け手のそれらに対する認知に大きな影響を及ぼすという仮説を
提示した研究が議題設定機能研究である。この研究は、一九六八年のアメリカ大統領選挙における争点をメディアと
受け手（有権者）との重要度の比較をしたマコームズとショーの論文を嚆矢として現在までに二〇〇余りの論文が発
表されている。^②この論文数の多さは、議題設定機能研究がさまざまな方面に拡張されてきた証でもある。七〇年代後
半からは、議題設定を左右する「随伴条件」（contingent conditions）の研究、八〇年代にはいると、受け手の側の争
点（パブリック・アジェンダ）、続いてメディア側の重要視した争点（メディア・アジェンダ）の考察がなされてき
た。さらに、争点の議題設定の競合の考察から、効果の領域が認知過程から態度や行動の過程に広がったり、顕在化
した争点が特定の立場を強調する「誘発争点」（valence issue）などに代表される後続効果への関心が生じてきた。^③

ここで議題設定機能研究と「政治漫画」との関わりをみるために、特徴を次のように五つに整理してみよう。①認
知と態度・行動レベルへの影響、②現実の再構成としてのメディアの役割、③「地位付与機能」^④の見直し、④送り手
研究との統合、⑤「随伴条件」と「利用と満足」^⑤の研究との接触。

①については、「何について考えるべきか」という思考の対象に影響することが、メディアへの接触量や争点のタイ
プ、情報探索欲求の程度などの「随伴条件」によって、「どのように考えるべきか」という思考の内容の示唆にまで議

題設定が影響を与えるといえる。「政治漫画」においては、「争点のタイプ」に近似した特徴がみられる。すなわち、「政治漫画」の伝えるべき内容によって読み手の認知・態度のいずれかに影響するかは異なってくるのである。国際問題や経済問題をテーマとするときには、その問題が読み手にとって十分な知識を持つ可能性が少ないので、内容の「解説」に主眼が置かれる。そのため、読み手の認知（たとえば、گران高原はどこにあるのかがわかるような「政治漫画」を描く）を考慮した作品になる傾向があると考えられる。他方、フランスの核実験に関する「政治漫画」のように、シラク大統領が他のメディアによって「既知」であるとみなした場合には、読み手に一定の態度を要求する「論評」の性格の強い「政治漫画」になる。

②では、社会的現実を多様な現実から選択しニュースとして受け手である一般大衆に提示することを考えれば、メディア・アジェンダがパブリック・アジェンダに大きく関与している議題設定機能の指摘は、「メディアが構成する現実」を受け手に提示していることになる。もっとも、以上の点はメディア全般に示すことができる。そこで、「政治漫画」における現実再構成の独自性は何かといえ、前述したように活字と画像との複合メディアであることが手がかりとなる。したがって、「政治漫画」において描かれたものと描かれなかったものの峻別をすることが求められる。同時に、「政治漫画」内の説明語句や「見出し」（「政治漫画内情報」）、および記事や社説のような「政治漫画」外情報のなかの文字情報における争点の顕出性と「政治漫画」の「画像」との比較によって、どのような「現実」を再構成したかをとらえることができるであろう。

③は②に付随して生ずる特徴である。マス・メディアが特定の争点を重要なものとしてとりあげる対象が人物である場合、受け手はメディアがわざわざとりあげたと考えて、その人物を争点における重要なものとみなしがちである。とすれば、ウィーバーが示したように、現実の構成のなかでも個人のイメージの構成がメディア主導で行われることになる。この傾向は「政治漫画」によって、特定個人の「戯画」がなされれば一層強まる。「戯画」は「政治漫画」の

中心的な構成要素であるから、対象とする人物にどのような性格を「付与」するかは読み手の（その「政治漫画」を面白く感じるかぎりにおいて）人物認知および態度に影響を与えるのである。

④は、議題設定の主体は誰かという問い掛けから、メディア・アジェンダの設定主体は誰かという問い掛けへと移行したものである。「政治漫画」では、新聞社の担当部局と漫画家との関連——制作過程、相互の権力関係、新聞の他の分野との（自己／他者）「認識」の違い（「新聞の盲腸」か「盲腸の盲腸」か）——を事例研究によって考察することが可能であろう。あるいはむしろ、雑誌漫画における作品の「組織化」に着目し、半ば「商品」と化した雑誌漫画の構造を分析し、それを掘り崩す手段を「政治漫画」の「構造化」との比較において求めることが考えられる。

III 内容分析

(1) 分析手順

一九九四年七月一日から同年九月三〇日までの「朝日新聞」、「毎日新聞」、「読売新聞」の各縮刷版（東京最終版）に掲載された「政治漫画」二二六枚を分析の対象とした。内訳は、「朝日」八九枚、「毎日」二六枚、「読売」一〇一枚であった。これら二二六枚の「政治漫画」について、①テーマの分析、②シンボルの分析、の二つに分けて考察した。

①テーマの分析

「政治漫画」が題材とする社会現象や出来事を一枚ごとに読取り、各々の「政治漫画」に対して一項目を原則として、内容に対応する出来事を抜き出した。その出来事を時系列にまとめるとともに、「政治」、「経済」、「外交」、「労働」、「世界」、「文化」、「社会」、「その他」に分類し各々の頻度を調べた。「政治」においては、下位分類として「内閣」、「国会」、「選挙」、「政党」、「政治倫理」、「その他」、の六項目を設定して分類した。テーマが一項目に限定できな

い「政治漫画」には二項目にまでまたがる「重複」を考慮した。⁽⁸⁾また、「政治」と「外交」の項目にはテーマ選定に影響を与えた諸要素を「政治常識」、「文化的示唆(事象)」、「人物の特徴」、「時事的項目」の四項目に分けて「政治漫画」一枚ごとに検討を加えた。

② シンボルの分析

「政治漫画」の内容について、主語・述語の関係が明確になるような短文を「政治漫画」一枚につき一文ずつ学部学生五人に作らせた。これを基にして、「主体」と「客体」と「述語動詞」に着目し、以下のように考察した。

「主体」と「客体」については、それぞれに登場する人物と事物の出現数を調べた。人物については、「政治漫画」一枚あたりの人数、「特定できる」人物の数とその内訳、などをテーマと関連させて考察した。事物については、何(誰)をシンボル化しているのかに留意して前述の学生五人に聞いたのだした。

「述語」については、短文の結果から類型化し、その類型にどのような「主体」や「客体」が描かれているのかを、背景となる政治・社会現象と関連させて分析を行なった。

以上の二つの視点からの分析の中で、既存の分析結果から得られた他の「連立政権」——細川政権(九三年八月〜九四年四月)、羽田政権(九四年四月〜同年六月)——との比較をも合わせて行い、村山政権のもつ独自性を明らかにしようとした。⁽¹²⁾

(2) 分析結果と考察

① テーマの分析

村山政権成立後三ヵ月間に「政治漫画」のテーマとなった出来事を時系列に表わしたものが(表1)である。六月

二五日の羽田内閣退陣を受けて、五五年体制下では考えられなかった自民党と社会党の連立、しかも片山内閣以来の社会党内閣となる村山内閣は九四年六月三〇日に成立した。この三カ月は村山内閣の社会党政権からの脱却を意味していた。（表一）からわかるように、七月一八日から五日間開かれた一二三国会において、村山首相は「自衛隊合憲」、「非武装中立」の撤回、「君が代」、「日の丸」の容認、等々従来の社会党の基本理念・政策を次々と「現実路線」に転換していった。七月初頭のナポリ・サミットで西欧諸国の、八月末の東南アジア歴訪で近隣諸国の「認知」儀礼を消化した村山政権は、若干の閣僚の揺れ（「桜井問題」）はあつたにせよ、前述の国会、九月の選挙と新政権に必要な「顔見せ」の儀式——外交訪問、所信表明、選挙——を一応「無難に」こなしたといえる。

表1 政治漫画のテーマとなる出来事

6・30	村山内閣成立
7・1	東京円、一時97円68銭
5	中村元建設相幹旋取賄事件初公判
6	米価据え置き 米審答申
8	ナポリサミット(～10) 日米首脳会談
9	金日成北朝鮮首席死去
14	自民党紀委、中曽根・渡辺両氏の役職停止を伝達
18	首相所信表明演説／最高裁新聞議員の上告棄却
20	衆院で「自衛隊合憲」と首相答弁
21	参院答弁で非武装中立の終焉を首相表明 「君が代」「日の丸」指導容認と首相発言
22	123国会閉幕(会期5日間)
23	日韓首脳会談
26	公共料金値上げ容認 政府決定
28	防衛費抑制3党合意 社会党が基本政策転換の議案決定
31	日米経済協議政府調達分野物別れ
8・1	社会党全国代表者会議批判続出
2	村山内閣資産公開
5	新党準備会発足を5氏会談で合意
6	広島平和式典で首相挨拶(被爆者援護法の言及なし) 海部・細川両氏、新党9月結成に慎重発言
7	新生党幹部、小沢氏へ静観を要求
9	首相会見「援護法と党内で議論を」
11	衆院選挙区画定審議会が「区割り案」を勧告
12	桜井新環境庁長官「日本は侵略戦争の意図なし」と発言(同日全面撤回、14日更迭)
17	ルワンダPKO派遣を与党が了承
18	新生党代表幹事に小沢氏復帰(新・新党起草委初会合)
23	首相、東南アジア歴訪出発(～30)
9・3	社会党臨時党大会、政策転換を提示
5	新・新党基本理念「責任ある政治」を提示
8	連合山岸会長が辞意
11	参院愛知再選挙、旧連立側圧勝
13	ルワンダ難民救済へ自衛隊派遣を閣議決定
22	政府・与党税制改革大綱を決定
23	日米包括協議合意持越し
27	藤波元官房長官に無罪判決
28	河野外相国連演説、武力不行使・常任理入り訴え 竹下元首相、自民党に復帰

ところで（表2）から、テーマ総数に対する「政治」、「内閣」、「外交」の割合をとり、細川政権、羽田政権と比較すると、「内閣」と「外交」は一五パーセント前後とほぼ一致していた。が、「政治」については、村山政権下では六三・六パーセントと羽田政権（八一・四）・細川政権（六九・四）を下回っている。細川政権は五五年体制の崩壊後初の政権であることから関心が高く、羽田政権は実質二ヵ月（六四日）であり、細川退陣から羽田指名まで半月近く間があり、「改新」結成に伴う社会党の政権離脱に代表される「政治抗争」が「政治漫画」のテーマとなることが多く結果として高率になった。これに対して、村山政権は就任三ヵ月は目立った政治的対立状況がなく、逆に自衛隊合憲、PKO容認などの「自民党的」政治姿勢が「現実路線」と野党（旧連立）に評価され政治的な対立を生じさせなかった。このことが「政治」項目の低率に反映されたとみることができる。

続いて（表2）から月別の特徴をみると、七月の「外交」の多さはナポリ・サミットによるものであり、八月の「政治」が最も多いのは桜井環境庁長官の戦争発言と新・新党設立への動きの活発化によるものである。細川・羽田政権の場合には就任時の月が最も多く「政治漫画」に描かれ徐々に減少する。ところが、村山政権では最初の二ヵ月は高く三ヵ月目に激減する。九月の「政治」項目の特徴は、「政策転換」やルワンダPKO派遣の問題などのように就任時からの継続的な問題である。このため目新しさに乏しい。また、政治的スタンスも与野党似通っているので参院愛知再選挙も与野党対決の図式ができあがっているにもかかわらず、「政治漫画」の組上に上る回数は少なかったとみることができる。

(表2) テーマ別出現数

	7月	8月	9月	計
政治	50	54	43	147
経済	3	2	5	10
外交	14	6	11	31
労働	0	0	1	1
世界	11	12	14	37
文化	0	0	2	2
社会	0	3	0	3
	78	77	76	231

ここで「政治」テーマの下位項目を考えると、(表3)のようになる。ここにおける「内閣」は政府・与党の動静である。この「内閣」の割合を細川・羽田両政権の場合と比較すると、細川政権(三四・一)、羽田政権(四六・九)に対して五三・七パーセントにも達する。細川・羽田政権はもともと「自民党」政権の亜流であったが、村山政権は社会党政権として戦後二番目である。このことが「自民党」政治の踏襲に結果としてなったとしても、もともとの政策の軸が異なるために「政治漫画」になりやすいと考えられる。つまり、政策転換の変動の差の大きさが細川・羽田政権との差になって表れたのである。さらに、「内閣」の動きは大テーマの「政治」項目の動きと似ている。政権成立後二ヵ月目にピークを迎え、三ヶ月目で安定する。政策の転換を提示した七月後半の国会から八月初頭までの衝撃の大きさを凌ぐものが九月には見いだすことができなかったとみられる。八月の「内閣」項目の登場数の多さの要因として、長期政権への期待をあげることができる。この月の「内閣」テーマを具体的にみると、「被爆者援護法」、「ルワンダPKO」、「税制改革」などのテーマにならんで「政権の持続」への楽観・期待を基調とするものがみられる(8/

11Y、8/1A⁽¹³⁾。一年間に三人の首相の出現が「連立」政権の特徴になりつつある反面、安定政権への希望となつて「政治漫画」に登場したのである。次に（表3）から与野党の各政党個別の動きをテーマとした「政党」をみると、三〇・六パーセントにも達する。細川政権（一八・六）、羽田政権（二五・〇）にくらべて高い比率になった。これは、二つの理由が考えられる。一つには、「連立」与党内の自民党・社会党の情勢に以前の「連立」政権に比べて関心が多くいつていることがある。自民党では党内改革、党規違反の処遇があり、社会党では、基本政策の変更に伴う全国代表者会議や臨時党大会における党執行部と党員（特に地方議員）との対立が「政治漫画」によつて描かれている。ここから「政党」においては「政治漫画」の基本的枠組みの中に五五年体制の自民・社会の対立の残滓があることがわかる。

もう一つには、前二政権が当時の野党である自民党や社会党の動静に目立ったものがないと「政治漫画」が判断したのに対して、村山政権では新・新党結成への状況をより詳細に描き出していることがある。野党の新・新党の結成への始動は「政治漫画」によれば七月七日の合同選挙対策委員会発足（7/9Y）であつた。「政党」四五枚のうち新・新党関係の「政治漫画」は二五枚と五割を超える。特に八月には「政党」全体の七六パーセントにも及ぶ。七月二五日の小沢氏の「新・新党九月結成」発言（8/7M）がいわゆる「観測気球」となつて、細川・海部・羽田・石田の各党首の新・新党への関心の度合いをはかることになった。この小沢発言に対して、時期尚早論が登場し（8/8A、8/10A）、新生党内でも小沢氏の先行を窘める動きがあつた（8/5Y、8/9Y）。しかし、九月五日には基本理念の決定（9/7M、9/7A、9/7Y）なされたことからみると、七月の小沢発言が新・新党結成への加速を促す触媒であつたことが「政治漫画」からうかがえる。

(表3)「政治」小テーマ月別出現数

	7月	8月	9月	計
内閣	27	32	20	79
国会	11	1	0	12
選挙	0	4	4	8
政党	10	17	18	45
政治倫理	2	0	1	3
その他	0	0	0	0
計	50	54	43	147

「政治漫画」のテーマを設定する要因として、修辞技法との関連を考えてみよう。テーマからは「政治」における「内閣」・「政党」と「外交」の三項目を選んで技法との関連をみることにしたのが(表4)である。

「政治常識」とは、政治現象一般を想起させる画像内の表現である。これをみると、言葉がテーマの設定に大きく関与していることがわかる。「内閣」、「政党」、「外交」いずれの項目においても言葉が「政治常識」を表象する手段として七・八割を占めている。とはいえ、ここからテーマの設定は言葉に依存しているのかといえはそうには断言できない。⁽¹⁵⁾ここでは、「言葉」を政治全般のイメージを喚起させる「政治(の言葉)」(政党、政権、権力、支持率など政治学概念や用語と共通する部分がある)と、その時々⁽¹⁶⁾の出来事に関わる「時事(の言葉)」(円高、公共料金値上げ、常任理事国入りなど)の二つに分けて特徴をみる。すると、「政治(の言葉)」と「時事(の言葉)」との比が「内閣」でおよそ二対一、「政党」と「外交」で一対三であった。これは、一般に認知されている政治学的用語の数が思ったより少ないことと、認知されている「政治(の言葉)」には解説は不要であることが理由としてまず考えられる。

これに対して「時事（の言葉）」は初めて「政治漫画」に登場することが多いために説明が要求される（人物に付属する名前や肩書きの「言葉」もこのような理由からである）。「時事（の言葉）」優位の例として、「内閣」における「毎日」の場合をみると、「政治常識」を表現する際に「政治（の言葉）」が一つも使われていない。ここからも手っ取りばやく時事的主題を理解させるための手段として「言葉」が用いられていることはあきらかである。

これに対して「政治常識」を示すシンボルは、「政党のシンボル」が半数を占め、次に「国会議事堂」（議会）、「日の丸」（国旗問題）、「ハト」・「タカ」（政治的スタンス）をそれぞれ括弧内を象徴するものとして用いられている。「文化的示唆」については、「内閣」では「自然現象（猛暑・渇水）」、「風物詩（花火・祭り）」、「機械・事物」の三項目がほぼ均等に二〇パーセント近くを占めている。渇水におけるガムの放水を村山政権の政策転換になぞらえた「政治漫画」（7/31A）や村山首相が元気にラジオ体操をするもの（7/31eY）などが「自然現象」、「風物詩」の例である。「政党」では、「風物詩」が四分の一近くに達する。たとえば、村山首相を風鈴にしてそれが起こす風で社会党の「基本政策」の看板を吹き飛ばすもの（7/24M）がある。「外交」においては、要素が拡散し傑出した特徴を見出すことはできなかった。なお、「人物」についてはシンボルの分析で、「時事的事象」は「政治常識」の「言葉」に包摂して説明した。

(表4) テーマ設定の諸要因

			内閣	政党	外交
政治常識	言葉	政治時事	22 40	11 29	7 21
		シンボル	22	6	3
	なし		6	1	3
	計		90	47	34
文化的示唆	風物詩		12	10	6
	自然		13	3	3
	芸術芸能		7	1	3
	スポーツ		8	4	4
	機械器具		11	5	2
	交通		3	2	3
	金銭		2	0	0
	その他		8	17	6
計		64	42	27	

② シンボルの分析

1. テーマとシンボル(人物)

シンボルの類型別の分析に入る前に、前節のテーマの分析に関連するシンボルの分析として人物の検討をしておく。(表5)は「内閣」・「政党」・「外交」のテーマにおける「政治漫画」一枚のなかの登場人物数をまとめたものである。これによれば、「一人」または「二人」登場する「政治漫画」がどのテーマも五〇から六〇台のパーセントを得ている。これは、「政治漫画」の「見かけの情報量」に起因する特質である。⁽¹⁶⁾村山政権の特徴は以下の点に示されている。「内閣」では与党三党の党首による運営を反映して、「三人」が二割強登場する。「政党」では、野党の新・新党結成の動きに呼応して野党の党首・首脳の人数の「四人以上」が三割占めている。この「内閣」と「政党」における人

物の結果は、一見時事的な特徴であるように見えながらも、前述した「政治漫画」の基本的性質である「一人または二人」の登場人物の方針を崩すことがないように考慮されている。というのは人物のこの原則は、次のような経験的結果をもとにしているからである。「一人」は主として出来事の中心人物——特に首相——であり、「二人」とは中心人物と対立候補とのやりとりによって構成されることが多い。とするならば、「内閣」の「三人」は与党・政府としてひとまとめにすることができ。また、「内閣」では村山首相ひとりでの行動も多く見られるので、柔軟性のある対応が可能である。「政党」にしても同じように、「四人以上」の枚数の多さは新・新党グループを一括してとらえ、政府との対立を「政治漫画」の中に含ませたものとみなすことができる。このようにみなせば、「外交」における「一人ないし二人」の高率は首相と外相のセットと諸外国との実際の割合としてとらえることができよう。

次に特定化された人物についてみると、「内閣」では村山・河野・武村の与党三党首で八四・三パーセントになった。村山首相ひとりでは四三・七パーセントと約半数を占める。政治を象徴するのに与野党の党首・首脳を用いる手法は、「政党」項目でも同様に行なわれている。与野党党首・首脳で「政治漫画」の登場人物の八〇パーセントに達するという点がこのことを例証している。また、ここにおける人物の与野党の割合は与党側一七・三パーセントであるのに対して、野党（旧連立）側は六二・七パーセントと与党のほぼ三倍半もの登場数がある。テーマの分析で明らかになったように、新・新党の結成が「政党」項目のなかでの主要な関心事になっていることができる。与党側も社会党の党大会や自民党の派閥解消の試みなどがテーマとなっている「政治漫画」には村山・河野両党首が登場する機会が多くみられる。しかし、「新党さきがけ」の武村氏は「政党」テーマの「政治漫画」に一度も登場していない。「さきがけ」独自の活動が「政治漫画」の素材として満足を得るものではないと「政治漫画」が判断したのは、「さきがけ」のもつ自民・社会という五五年体制の対立政党を繋ぐ役割を重視したからである。つまり、「さきがけ」は議席数の少なさもあって、単独では政治の舞台に立つというよりも政権の中の調整役としてキャスティングボードを握って「黒

子」役に撤している。それゆえ、「政党」項目に当該党首（代表）が登場することはないのである。

「外交」においては、村山・河野・武村の政府首脳が人物の七割に及ぶ。ここでも中心的役割は村山首相と河野副総理である。（登場回数にして武村氏は二人の三分の一程度である。）役割の違いと役職の違いが「政治漫画」において如実に表れたことを「政党」と「内閣」の人物の傾向は示している。

（表5）「政治漫画」の登場人物数

	内 閣	政 党	外 交
1 人	32	15	11
2 人	20	10	10
3 人	17	3	2
4 人以上	7	14	8
0 人	3	4	0
計	79	46	31

2. 「主体」の分析

（表6）によれば、「政治漫画」の「主体」における人物は事物にくらべて圧倒的に優位な状況にあることがわかる。「内閣」・「政党」の「政治」テーマは八割強、「外交」にいたってはほぼ全部が人物を「主体」に設定した「政治漫画」になっている。羽田政権の場合でも九割を超していたのでこの点では違いはみられない。「外交」の人物重視（偏

重）は、テーマの分析の「言葉」についてみたのと同じように、「外交」・「世界」にのみ登場し「政治」項目には登場しない人物（サミットでの西欧諸国首脳、アジア歴訪の際の諸国首脳など）が多くみられるために、一度の機会に読者に認知させようと「言葉」との併用も厭わずに人物を多用することによる。

次に「主体」の人物がどの程度特定化されているかを（表6）からみると、「内閣」、「政党」ともに九〇パーセントを超える。「内閣」では、与党首脳が八八・二パーセント、野党首脳が四・三パーセント、首脳を除く与党政治家が七・五パーセントという内訳になっている。「政党」については、野党首脳が六八・五、与党首脳が一八・五となり、その他の政治家が与党で九・二、野党で三・七、というパーセントを得ている。「内閣」における与野党政治家の登場比率は、単独・集団いずれにせよ与党政治家の作用に重点が置かれていることを示している。「政党」では、野党と与党の政治家の登場枠がある程度定められており、相互作用の可能性を示唆するものである。また、前節の「主体」―「客体」渾然一体となった「人物」の傾向と差異があまりみられないのは、「政治漫画」の中で「主体」としての人物の影響力の強さを示している。「外交」についてもこの傾向（「主体」の人物の優位）はみられる。河野・村山で七割を占める。

ここで「首相」の登場数を羽田政権期の「政治漫画」と比較してみよう。羽田首相（当時）は一三三枚中二五枚（二〇・三パーセント）であるのに対して、村山首相は一六四枚中七一枚（四三・三パーセント）と羽田氏のはほぼ二倍の登場数がある。（「政治」項目すべての「政治漫画」の首相登場数とを比較した。）「政治漫画」の首相は政治のリーダーシップを象徴する。自民党単独政権時代と比べても「政治漫画」における首相の役割は変わっていない。¹⁷むしろ、連立政権が到来して首相の役割は増加したようにみえる。というのは、同一政党とは異なった主義・主張を互いに持ち、わずかの政策の合意を頼りに政府・与党内の調整を行なう必要が生じたからである。「政治漫画」がリーダーのスタイルを全て描きだしているかどうかは断言することはできないけれども、この比較では羽田氏の影の薄さを改めて

確認させる結果となった。

(表6)「主体」の構成

	内閣	政党	外交
村山	51	8	17
河野	20	2	8
武村	11	0	0
細川	1	6	0
羽田	2	7	0
海部	1	7	0
石田	0	4	0
米沢	0	5	0
小沢	0	7	0
市川	0	2	0
不破	0	1	0
その他与党政治家	7	5	1
外国政治家	0	0	11
非特定者	5	6	0
人物計	98	60	37
事物	17	12	1
総計	115	72	38

3. 「客体」の分析

(表7)をみると、「内閣」とその他二つの項目とでは人物と事物の割合に差があることがわかる。「内閣」では事物が人物を四倍程上回っている。これは、自民党政権下では、シンボル化される人物が明瞭であったことと相俟って、「主体」の人物の生ずる行動の影響をモノで受けとめて人間間の対立状況を緩和させるねらいがあったことに通ずる。しかしながら、村山政権下の「内閣」の「客体」の事物は人間を象徴していないものが多い(事物内で八割強であ

（表7）「客体」の構成

	内 閣	政 党	外 交
村 山	5	2	5
河 野	1	0	6
海 部	0	3	0
羽 田	0	3	0
細 川	0	3	0
小 沢	0	2	0
クリントン	0	0	2
その他の与党政治家	0	1	0
その他の野党政治家	0	1	0
その他の海外政治家	0	1	5
非 特 定 者	3	2	2
人 物 総 計	9	18	20
事 物	38	16	11
総 計	47	34	31

る）。連立政権下では、「主体」となるべき人物でさえも縷々変化する。細川・羽田・村山の歴代首相が一年で登場したことを考えると、「客体」においてもこの傾向は変わらない。そのため、擬人化すべきシンボルを見つけ出すほど人物が「政治漫画」にとどまっていけない事態が生ずる。事物による事項の象徴化傾向は「政治漫画」のなかに登場する人物をふくむ情報容量の限界を示唆していると推測される。それゆえ、別の角度からの情報容量の拡大が求められる。

4. 「述語」の分析

(表8)は、「政治漫画」の動作・状態の描写を分類したものである。それによると、「内閣」では「予期せぬ結果」と「積極的行為」で半数弱を占める。この二つの項目に村山政権の特質を「政治漫画」が描きだしている。「述語」が「政治漫画」に登場する人物や事物の作用の結果を意味するものであるとすれば、人物や事物の描かれ方の一環としてシンボル化傾向とならんで「政治漫画」の対象に対する評価がにじみ出るところである。村山政権においては、「予期せぬ結果」において政権への懸念を、「積極的行為」において政権への「幾分」肯定的な評価を「政治漫画」が与えている。

「予期せぬ結果」に関しては、「朝日」では連立の不調和を象徴させている(7/2A、7/3A、7/15A、7/29Aなど)。「毎日」では、連立に内在する対立状況と対照状況をあわせて描きだしている。バードウオッチングでハトを強調する首相を尻目にハトの顔をしたタカが発見される(8/17M)ような「政治漫画」が多く見られる(7/3M、8/14M、8/18Mなど)。「読売」も対照性を重点に連立の不調和を描いている(7/31Y、8/7Y、9/16Yなど)。

「積極的行為」では、「朝日」がもっとも批判的で冒険への挑戦を描くことから失敗を暗示させるものが多い(7/5A、8/19A、8/30Aなど)。「毎日」と「読売」は「冒険」に先取りや旧弊の打破を読み込んでいる(8/21M、9/25M、7/1Y、7/28Yなど)。河野副総理に背負われていた「老人」村山首相(7/5A)が、スケートボードで旗門(政治諸課題)を通過したり(7/28Y)、高齢者とともにTシャツで踊る(8/20eY)「政治漫画」の描写がこの政権の評価の変容を端的に表している。連立の課題、高齢の懸念をいずれも乗り越えようとしているとみなしている。村山政権への肯定的な評価が「政治漫画」の中に見え始めているのである。新政権成立

（表8）「述語」の内訳

	内 閣	政 党	外 交
消極的行為	12	12	6
予期せぬ結果	20	5	2
局外者作用	10	2	2
感情の表出	9	1	8
積極的行為	14	16	6
観察・測定	5	1	0
命令・指令	0	3	0
儀礼的行為	0	0	2
そ の 他	11	4	4
計	81	44	30

当初の期待と不安の混在した状況が成立三カ月間の「政治漫画」に投影されているともいえよう。

IV おわりに

連立後初めての「社会党政権」である村山内閣は、実質的には自民党政権の政策を継承することによって野党である旧連立側の批判の矛先をかわし政権の安定をはかろうとした。「政治漫画」の議題設定能力に着目し、外在的な特徴に重点を置いて内容分析を行なったのが本稿であった。「テーマ」の分析では、「政治」項目全体をみれば細川・羽田政権に比べて目立たないが、内部に対立を含みつつも野党や諸外国といった対外的な対応では柔軟な姿勢がみられた。この柔軟な姿勢は「シンボル」の分析においても見られ、ことに「述語」の分析において意外性のある柔軟性と位置

付けることができた。「政治漫画」それ自体にも従来の五五年体制時のそれとは異なった特質が抽出された。政治常識の言語による表現の増加や「客体」における事物シンボルの機能の変容などがこの特徴としてあげられる。今後の課題として、「政治漫画」の議題設定機能の中で態度への影響を狙った表現技巧を分析する方法が求められることがあげられよう。そのためには「政治批判の道具」という「政治漫画」の特質にたちかえることが必要となろう。

註

- (1) Maxwell E. McCombs, & Donald L. Shaw, "The agenda-setting function of mass media," *Public Opinion Quarterly*, 36, 1972, 176-187.
- (2) E. M. Rogers, J. W. Dearing, and D. Bregman, "The anatomy of agenda-setting research," *Journal of Communication*, 43(2), 1993, 68-84.
- (3) A. Cambell, P. E. Converse, W. E. Miller, and D. E. Stokes, *Elections and the Political Order*, 1966, p.170.
- (4) P. F. Lazarsfeld and R. K. Merton, "Mass Communication, University of Illinois Press, 1960, p.p.497-499. (学習院大学社会学研究室訳「マス・コミュニケーション」大衆の趣味「組織的な社会的行動」「マス・コミュニケーション」東京創元社、一九六八年、二七六―二七八頁)。
- (5) ⑤の「利用と満足」の研究と議題設定機能・「政治漫画」との関わりは後日、「政治・メディア・政治漫画(3)」において言及するも「さ」は触れなす。
- (6) D. Weaver, D. Graber, M. McCombs, and C. Eyal, *Media Agenda Setting in a Presidential Election: Issues, images, and interest*, Praeger, 1981. (竹下俊郎訳「マスコミが世論を決める」勁草書房、一九八八年)。
- (7) 以下「新聞名を「朝日」、「毎日」、「読売」のように略記する。
- (8) 「政治漫画」の「重複」は選挙の争点の時に見られる。拙稿「選挙と「政治漫画」―研究動向・内容分析」(「選挙研究」第五号、一〇五頁―一一九頁)。

- (9) メドハストらの論文の「主題設定」を参考にした。M. Medhurst and M. Desousa, "Political Cartoons as the Rhetorical Form," *Communication Monographs*, 48(1981), 197-236.
- (10) 法学部政治学科に所属する三年生五名である。
- (11) 前出の学生が名前が判明した人物を基準にした。
- (12) 細川政権は九三年八月から、羽田政権は九四年四月から、それぞれ三ヵ月を比較の対象とした。
- (13) 「政治漫画」は（月／日 新聞名イニシャル）と表した。なお、夕刊掲載の場合、「e新聞名イニシャル」と表記した。
- (14) 本稿では「政治漫画」の呼称を「政治漫画」の送り手全体を指す場合にも用いる。
- (15) 「主題設定」の他の要因との相互作用については今後の課題としたい。
- (16) 拙稿「政治漫画にみる政治過程——P K O 法案における政治漫画の内容分析」（『北陸法学』第一巻一・二合併号、一九九三年、九四頁）。
- (17) フェルドマン・オフエル「政治マンガにみる『日本の首相』（『潮』二月号、一九九三年、一二〇頁）。